七人塚（しちにんづか）

登場人物

ナレーター

かこちゃん

祖母（そぼ）

箸職人（はししょくにん）

女房（にょうぼう）

村の男（むらのおとこ）

役人（やくにん）

手下（てした）

和尚さん（おしょうさん）

留守番の人（るすばんのひと）

村人1（むらびと1）

村人2（むらびと2）

村人3（むらびと3）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

もうじき今年も暮れるという年の瀬の昼下がりに、かこちゃんとおばあちゃんは近くのショッピングストアーにでかけました。かこちゃんのお父さんとお母さんの結婚記念日がもうすぐなので夫婦箸を買いにきたのです。

祖母　「さぁて、この辺にお箸売り場がありそうだわねぇ。ああここにあるわ。どれにしようかしら。」

かこ　「アッ、これきれいよ、おばあちゃん。貝殻がくっついてる。お母さん好きそう、ピンク色できれいだもん。ホラこれもいいなあ。金色や銀色の模様がすてき。お父さんが喜びそう。ねぇおばあちゃん、、、おばあちゃん。どうしたの？」

祖母　「あら、ぼんやりしてしまったねぇ。おばあちゃんね、お箸のお話をおばあちゃんからきいたことを思い出してね。」

かこ　「えっ、ひいおばあちゃんにどんなお話きいたの？かこききたい。」

かこちゃんにせがまれたおばあちゃんは、近くの椅子に座ると遠くを見るように目を細めゆっくりと話し始めました。それは箸作り

一家の悲しいお話でした。

むかし吉岡の芦が久保という所に、働き者の箸つくりがいました。その男は、箸をうまく仕上げる腕の良い職人でした。毎日木をわり、せっせとけずり上手にはしを作っていました。けれどいつも暮しは貧しく食べるのがやっとという毎日でした。ある年、とうとう箸の材料にする木がなくなってしまいました。

箸職人「よわったのぅ。箸を作る木がもうねぇ。金もねぇし、買うことも出来ん。箸を作らんと子供らに飯を食べさせることもままならねぇ。どうしたものか。」

箸職人　箸つくりは、何日も眠れない日が続きました。

箸職人「このまんまじゃ、食べさせるもんがなくなる。あっそうじゃ。」

箸つくりは何を思ったか、おかみさんも子供たちもぐっすり眠っている夜中にそっとふとんを抜け出しました。

箸職人「このまんまじゃ一家飢え死にじゃ。仕方ねぇ。仕方ねぇ。」

男はブツブツ言いながら真っ暗な道を急ぎました。

箸職人

あたりはふくろうがホーホーと鳴くだけで、シーンとしています。男が向かったのは、近くの林でした。その林は「お林」と呼ばれる幕府が直接管理していた林で、そこの木を切る事は固く禁じられていました。

しかしそこにはたくさんの杉の木が植えられていたのです。杉の木は箸を作るのにとても適した木ですが、「お林」の木を切るなんてことは、とんでもないことでした。男はその掟を破ってしまったのです。

「神様どうかお許しくだせぇ。子供らに飯を食わせなければなんねぇんです。どうかどうか。」

男は迷いながらも意を決して、のこぎりで杉の木を切り始めました。人に見つかれば一家打ち首という重い罪です。男の胸は罪の重さにドキドキ、足は恐ろしさでガタガタ、手は神への恐れでブルブル震えていました。やがて大木は、ミシミシバサッと大きな音をたてて倒れました。

男はなたを取り出し、枝を切り落としました。それから急いで枝を

村の男
役人
役人
箸職人

役人
村人1
村人2

たばねて背中に担ぎ、家に戻りました。
この真夜中の出来事の一部始終を見ていた村の男がいたのです。
「お役人様、大変です。箸職人が、お林の木を切ってしまったんで。」
村の男は、そう役人に密告しました。
「それは何としたことか。早速ひっとらえよ。」
次の日箸つくりは、いつものように仕事をしていました。そこへ役人が手下をしたがえてドカドカとやってきました。
「それは、お林の木だな。こともあろうにお林の木に手をかけるとはふとどきせんばんである。ひっとらえよ。」
「あっしはどうなってもよいですが、どうかあとの者はお助けください。」
と箸職人は必死に頼みましたが、
「何を言うか。」
と頼みは、聞き入られませんでした。
「何とかならんか。ふと魔がさしただけなんじゃろ。」
「まだ年端も行かない子供らまでじゃあ、あんまり酷だべ。」

村人1
村人2
村人3
留守番人
和尚

村人たちは口々に言って何か良い考えがないか相談しました。
「おお、そうだ、済運寺の和尚さんに頼んでみよう。」
「そうだそうだ。役人も和尚さんの頼みは無げには出来ねぇだろう。子供らだけでも助けてもらおう。」
「和尚さんには役人も頭があがらねぇからな。」
その時代には、お坊さんの力も強くて、お坊さんの助言があれば刑を軽くして貰う事も出来たのです。村人たちは、我先にとお寺に行きましたが、あいにく和尚さんは、旅に出ていて留守でした。お寺の留守い番の人は
「事情をきけば、急を要することです。早速飛脚を出しましょう。行き先は承知しています。」
そう言って和尚さんに急ぎの知らせを届けました。旅先のお寺でその手紙を読んだ和尚さんは、
「あの働きもんの箸つくりを、しかも一家皆殺しとは何と殺生な、たった一本の木ぐらいで殺してなるものか。」
と旅を止めて処刑場に急ぐのでした。

女房

箸職人

手下

その頃箸職人たちは、泣く泣く処刑場に向かっていました。処刑場は、丘の上のさびしい場所にありました。役人たちに追い立てられて7人は登っていきました。丘にいくまでの坂道は、わずか３００メートルですが、急坂で一人で上るのさえ容易ではありません。箸職人の女房は、五人の子供の手を引いたりおぶったりしながら

「えんこらしょ。えんこらしょ。みんなすまないねぇ。すまないねぇ。」

と涙に枯れた声を絞ってやっと登っていきました。箸職人は、

「えんこら。えんこら。何の罪もない子らは助けたかった。子供たちが不憫じゃ。」

と泣きながら登っていきました。

処刑場では、村人たちは、和尚さんが来るのを今か今かと待っていました。和尚さんを待っていたのは、村人だけでなく役人の手下も同じ思いだったのです。まだ幼い子供たちの首をはねるのは、掟とはいえあまりにもむごいとためらっていたのです。

「坊主はいねえか。坊主はいねえか。」

和尚

和尚

と処刑場を取り囲んでいる村人たちに叫びました。
その頃和尚さんは、必死になって処刑場に向かっていました。
が、和尚さんは生まれつき片足が悪かったので、思うように歩けなかったのです。
和尚さんが、息をきらして駆けつけたのは、処刑が終わって間もなくのことでした。
「間に合わなかったか。無念じゃ。かわいそうなことをした。」
そういって深く腰を落し、うなだれました。そして
「せめてあの世で親子そろって暮らせるようにのう。」
と涙ながらに新しい塚をつくり、村人たちと厚くとむらってやりました。
それから程なくして、新しい塚にとりすがって泣いている娘がいました。それはただ一人、嫁にいった箸職人の娘でした。嫁にいったので娘は殺されずにすんだのでした。
この7人を葬ったのが、「七人塚」でこの塚の南側にある坂は、えんこらさと登った坂なので「えんこら坂」と名づけられたのでした。

かこ「おばあちゃん、悲しいお話ねぇ。」

祖母「本当にねえ。おばあちゃんも昔聴(き)いた時切(せつ)なかったよ。」

かこ「うん。」

祖母「かこちゃん、さあてとお箸みつけようかねえ。どっこいしょっと。」

かこちゃんは、おばあちゃんと手をつないで歩きはじめました。

そしてお父さんお母さんお兄ちゃんそれにおばあちゃんと一緒(いっしょ)にいる自分って幸せ(しあわ)なんだなぁ、と思いました。

かこ「お父さんとお母さんの気にいるお箸みつけようねぇ。ねぇおばあちゃん。」

注釈　：吉岡のある家には今も七人の位牌(いはい)が祭(まつ)られていて冥福(めいふく)を祈(いの)っておられます。

済運寺：臨済宗のお寺で本尊は江戸時代の木造釈迦如来像です。
本堂は十八世紀前期、庫裏は文久三年（一八六三）の
建築です。春日局の位牌と局が使ったという茶釜があり、
またこのあたりに局の御殿があったといわれています。